《芽ばえ賞》

「あたり前の大切さ」

有田市立初島小学校　5年
川端（かわばた）　新大（あらた）さん

「来年の七月の四連休に福岡へ旅行に行こかー。」
お母さんと言って、家族のスマートフォンに勝手に予定を入れた。これは、二〇一九年の七月の事だった。この時コロナウィルスを予測した人はいたのだろうか。
この旅行は、フェリーで行く予定だった。
しかし、五月になり、いきなりこんなニュースが流れた。
「ダイアモンド・プリンセス号で感せん爆発
六百人ごえ。」
そうしていると、九州地方でも感せん者が増加。ついにこの旅行はキャンセルになった。ぼくたちみたいなお客さんがいっぱいで大変だったと思う
次に考えた行き先は、近場で三密になりにくいという事を視野に入れた。三重の山おくだった。近き地方は感せん者が少なかったのと、外でテニスなど、外で楽しめる事が多かったからだ。密になる可能性も低く、ここなら大丈夫と、楽しみにしていた。しかし状きょうが少しずつ悪くなっていき、この計画も変更することにした。県内にしようという事で和歌山の勝うらに行くことにした。同じく屋外で楽しめるし、つりなどもできる所だ。でもやっぱり直前になって取りやめた。この勝うらの中止は、家族会議で決定した。ぼくとお母さんとおばあちゃんは、
「せっかく予約取れたんだから行きたいなあ。
行けるかなあ。」
と言った。おじいちゃんは、
「迷ってるんやったらやめとけ。」
と安全を考えて言った。この発言で場が一度固まってしまった。そこでぼくが、
「お父さんは？」
と聞いた。するとお父さんは考えこんでから、「コロナは感せんしょうだから、もしかかって入院したら。家族でも面会に行けないよ。
一人さみしく病気とたたかわんとあかん。
そうなるリスクと、行きたい気持ちを天びんにかけたら今回はなしやな。」
としんけんに言ったその言葉で決まった。
しかたなく旅行はあきらめて、この四連休は、家族で市民体育館のとなりのコートでテニスをしたり、学校のプールへ行ったり、家でカードゲームをしたりして遊んだ。ずっと家の近くで過ごしたが家族で楽しめた。
コロナウィルスで残念な事もたくさんあった。でもコロナウィルスに気づかされた事もたくさんあった。毎日学校に行ける事、友達と思いっきり遊べる事、ふだんの別になんて

ないと思っていた事がどれだけ幸せだったかという事
　でもやっぱり早く終そくして、今までの何げない日々を、何も気にせずに思いっきり楽しみたい。今までのあたり前の生活の大切さを感じながら。